

寄り添い癒やし20年

小児病棟 遊びのボランティア

病室のベッドで、声をからして泣き叫ぶ。小さな命を放っておけない。小児病棟の現実、心を痛めた保育士が1999年に始めた「遊びのボランティア」。つらい治療に耐え抜く子どもとその親に寄り添い、笑顔を送って不安を癒やす地道な活動は20周年を迎えた。支援の輪は各地に広がる。

東京都新宿区の古いマンションの一室。盤ゲームに絵本、膨大な資料で雑然とした狭いワンルームが、NPO法人「病気の子ども支援ネットワーク」のボランティアが昨年初めて構えた事務所だ。2年前、匿名の主からの寄付金1千万円で実現。「お母さんが看病の合間に立ち寄って、息抜きしたりシャワーを浴びたりできるのよ」。坂上和子代表(57)はうれしそうだ。

坂上さんは89年、新宿区に住む入院児の訪問保育士として、現・国立国際医療研究センターに派遣された。廊下で点滴を転がす小さな患者たちは、うつろな表情だったが、楽器や人形劇の装置を運び込むと「砂糖に群がるアリのよう」に集まり、歓

声を上げた。高度医療を受ける子どもたちの日常に驚いた。仲間5人とボランティア組織を立ち上げ、毎週土曜日に病院を訪ねた。資金はなく、玩具メーカーに頼んで「売れ残り」をもらった。手伝いに来る学生や社会人は幼い笑顔にやりがいを感じてくれた。2004年度以降、ボランティア活動の実態把握も始めた。遊んだ子どもとボランティアの人数、訪問回数、子どもの年齢、点滴の有無、遊ぶ前後の子どもの変化など。データは病児の置かれた状況を行政に訴えたり、ほかのボランティア団体の活動を支援したりしている。転機は05年、8歳の少女との出会いだ。がんと闘い、治

療の副作用で失明し、無菌室にいた。坂上さんの折り紙に喜び、いつも手を握らせていた母親に休息を許した。だが、ある日、少女は爆発した。骨髄移植中に「点滴を外せ！」と泣きわめき壁に体を打ち付けた。少女は嗚咽しながら「ボランティアさん、毎日来て」と言った。大人でも耐えられない厳しい高度医療の日々でも、こんなに遊びたがっている。坂上さんは保育士などを辞めてボ

入院中の子どもたちを遊ばせるボランティア活動は全国に広がる。プレールームなどに集めて遊ばせるだけでなく、動けない子どものベッドサイドへ行くこともある。首都圏では、東京医科歯科大付属病院など5施設で「遊びのボランティア」を展開。大付属病院など5施設で「遊びのボランティア」を展開。年齢に応じた遊ばせ方や衛生面やプライバシーの配慮といった心構えを身につけた人を派遣する。

配慮・心構え身につけ派遣

このほか、NPO法人「難病の子ども支援全国ネットワーク」(東京都)も「プレイリーダー」と呼ばれる人材養成講座を開始。修了者が関東の子ども病院などで活動する。赤い鼻をつけたピエロなどの道化師(クラウン)たちが平日の小児病棟を訪れ、子どもたちと交流するのは2006年設立のNPO法人「日本ホスピタル・クラウン協会」(名古屋)の取り組みだ。全国42病院を定期的に回る。

一方、海外では、遊びを通して治療を理解させたり検査の苦痛を和らげたりする「チャイルド・ライフ・スペシャリスト」(米国)、「ホスピタル・プレー・スペシャリスト」(英国)などと呼ばれる専門職がある。日本でも確立させようと医療関係者が「子ども療育支援士」の創設を唱え、今年度から養成を始めている。(高橋美佐子)



無菌室でお絵かきする子どもとボランティア
坂上和子さん提供

■遊びのボランティアの心得

- ①遊びを通じ、子どもとかわる時間を大切に
 - ②子どもの名前や病名など個人情報を守らない
 - ③活動を休んだり遅れたりする時は必ず連絡する
 - ④体調が悪い時は無理せず、互いの感染予防に努める
 - ⑤点滴、ベッドの柵、誤飲など、安全に気をつける
 - ⑥約束したことは守る
 - ⑦金銭やプレゼント、物の貸し借り、宗教勧誘は厳禁
- 「病気の子ども支援ネットワーク 遊びのボランティア」発行のハンドブックから

(高橋美佐子)

ランティアに専念、06年にNPO法人は認証された。

09年度のボランティア登録数は62人。子どもの6割近くが未就学児。46%が3歳以下で、7割が点滴をつける。「ひとり親や共働きで孤独な闘病が増えている。子どもにとって『遊び』は命で、権利。見捨てられない」

20周年記念フォーラムは10日午後1時から、東京都中央区日本橋公会堂。事前申し込みは1千円、当日1500円。問い合わせは同法人(080・5527・4379)かHP (<http://www.hospitalasobivol.jp/index.html>)